論文

正定事件研究
― 歴史認識と列福についての問題 ―

峯崎　恭輔（自民党福岡県連学生部 幹事）

1．はじめに

正定（せいてい）事件とは、82年前に中国で起きたカトリック宣教師拉致殺害事件である。歴史的に見ればごく小さな一個の犯罪であるが、現代においては歴史認識の相違による政治的・宗教的問題として取り扱うべき事件である。それは、本件被害者が日本軍の魔の手に落ちようとした婦女子を守って身代わりのような形で「殉教」した、という通説[1]が学術的根拠に乏しいだけでなく、ローマ教皇庁において「列福」の審査を受けているからである。列福とは、平たく言えばカトリック教会における信徒顕彰システムの一つであり、信仰に基づく立派な行いや奇蹟を評価する中で「福者」という称号を与え、その生涯と偉業を後世に伝え、崇敬の対象とするものをいう。

列福の申請は、2014年に最上位被害者出身国にして最大の被害を出した（９名のうち３名）オランダから出され、2015年にバチカンより審査開始の宣告がなされている。もし日本人が自ら先人の身の証を立てる研究をし、教皇庁が審査中にその成果を伝えなければ、列福が決定した場合、悪逆非道な日本軍に抵抗した英雄としての福者列伝が教会内で半永久的に語り継がれることになる。これに対し後から異議を唱えて、一宗教組織にして一国家でもあるバチカンの決定を覆すことはほぼ不可能である。故に確かな学術研究成果を基礎とし、カトリック教会を理解した上での老練な外交手腕と粘り強い対外宣伝が必要とされるのである。まさに政治問題なのである。

原因となった事件は、支那事変が勃発した1937年の10月9日に発生した。中華民国河北省正定を日本軍が占領したその夜に、町にあったカトリック宣教会から９人の欧州人が少人数の武装集団に拉致され、その後戻らず、後日被害者の遺留品が骨や灰と共に発見されたため、全員死亡したとみられるものである。結論から言えば、実行犯の特定や検挙は当時も現在もできておらず、動機についても推測の域を出るものではない。それにもかかわらず、日本軍がカトリック宣教会において200人もの婦女子を慰安婦として徴用しようと試み、これを拉致被害者のスフラーフェン正定司教ら欧州人が抵抗し阻止したため、恨みを買って殺された、と現代において喧伝されている（これを研究したスフラーフェン財団の名から財団説と呼称することにする）。ついには列福申請の報告書がローマに送られ、審査開始認可が下りた。そして、その結果がどのようなものになるか、またいつそれが出されるのか、審査を所管する者以外知ることはできない状態にある。

本稿では、事件及び歴史認識の相違について考察し、財団説に基づくオランダや中国における現代の顕彰活動に触れながら、この問題の対処について述べることにする。

2．宣教師拉致事件

正定は河北省正定縣の縣公署所在地である。北平（北京）と漢口を結ぶ平漢線が通り、交通の要衝である石家荘からは約10kmの距離である。歴史ある都城であり、事件当時は高く厚い城壁と水濠で囲まれていた。この縣城内にカトリックの修道院群と付属する福祉施設や産業施設が宣教会（Mission）[2]を形成していた。約３km四方の縣城内に約500m四方の宣教会の敷地を有し、布教保護を担うフランスの国旗が掲げられていた。ここに正定代牧区[3]の司教座があり、代牧を務めていたのが被害者であるオランダ人、フランス・スフラーフェン司教（Frans Schraven）であった。

支那事変において、北支那方面軍第１軍は、1937年10月8日に正定縣城及び周辺陣地に対する攻撃を開始し、翌９日朝に正定を占領した[4]。第１軍の第６師団をはじめとする日本軍戦闘部隊は正定を素通りして、正定から敗走する将兵を収容した国民革命軍第１戦区第２集団軍の主力が陣取っている滹沱河に達した。ここを抜けば石家荘を占領できる。日本軍は河岸の予定配置につき、翌日に予定された渡河攻撃に備えた。

正定縣城内のカトリック宣教会では、午前中から兵隊たちによる略奪が起きていた。これについて教会側の初期の記録に「日本兵」と記したものはなく、個人あるいは少人数の集団で壁を越え、屋根を伝って、戸を破壊して宣教会に侵入してきた「兵士」による犯行であったとなっている[5]。しかもその容貌は日本人というより満人、朝鮮人のようであったという証言記録もある[6]。特に宣教会の東半分にあった修道院や工房、学校などで略奪や破壊が行われ、殺人も１件発生した[7]。

午後になると、訪ねてきた日本軍将校が苦情を受けて、破壊された通用門を塞ぎ直し、立入を禁じる旨の掲示をし[8]、夕方17時頃には、将校団が司教への表敬と施設の視察に訪れた。視察は平和裏かつ友好的雰囲気の中で行われたことが、修道院側の記録から分かっている。第６師団長と思しき高級将校は、避難していた子供に片言の中国語で話しかけたり、病院に収容されていた中国軍負傷兵を見舞い、医薬品の提供と軍医の派遣を約束したりしている[9]。

ここまでが欧州人カトリック宣教師が拉致される直前の状況である。教会側の史料では、略奪を行っていた「兵士たち」が日本と中国どちらに属するか、明確に書いていない。将校たちについては、明確に日本軍であると書いてある。司令官クラスの高級将校と宣教会の責任者が顔を合わせた夕方の視察では、略奪や破壊、殺人に抗議した様子がないし、日本側に立入禁止の掲示をした以外、略奪を取り締まろうとする動きも見られない。また、将校たちが略奪をする兵士たちに遭遇したような記述はどの記録にもない。しかしながら、略奪は９日から10日にかけて断続的に続いたことになっている。記録の中には50頭の馬と共に日本軍とも中国軍とも言えない兵士たちが２日間居座っていたと伝えるもの[10]まである。敷地が広く区画が塀で仕切られていて全てが見通せる状態になっていなかったせいか、あるいは状況全般を冷静に見通せた人物が一人もいなかったせいか、各記録間の不一致や不確実な要素が多く、これを理解するのは容易ではない。

視察団が引き上げた後、宣教会の正門は閉じられた。そして午後18時前後に10人程度の武装集団が現れ、開門を門番修道士に対し迫った[11]。どうやら彼らはトラックでやって

きたようである。開門要求が拒否されたので、彼らはトラックを使って壁を乗り越えたからである[12]。この点については、当時正定の町に自動車はなく、運転できる者もいなかったという記録がある[13]。また、日本軍占領直後の夜間に自由に往来を通行できた事実は、日本側の責任を追及した宣教会や外交官にとって、後々犯人像を考える上で一つの重要な要素になった。

さて、この集団は全員拳銃や小銃で武装しており、軍服を着用していた。中には民間人の帽子を被っている者もいたが皆「兵士」らしかった[14]。門番修道士は中国人であり、拉致被害者たちも含め、犯人たちは一貫して中国語、所謂官話方言を使用して問題なく意思疎通を行っている。特に主犯格と見られる男は流暢に、そして熱河地方の訛りがあったと特別の注意を払って記録している[15]。しかし半数以上のものは無言であったので、様々な推測を可能にする原因となっている。

犯人たちは正門を突破すると、近くの中国人のみの尼僧院（聖若瑟修女會）に押し入った。ここでの重要な事実は、犯人が特に何もせず短時間のうちに出てきたことである[16]。これは外国人が標的であったことを示す最初の事実である。フランス人のシャルニ（Lucien Charny）、ベルトラン（Eugène Bertrand）両神父が正門付近で拘束され、問番小屋に監禁された[17]のはこの頃である。彼らの見張りのために２人がその場に残った。ついで、尼僧院の向かい側（東側）にある、中国人のみの男子修道院（保祿會修道院）や工房、学校がある区画で、避難してきていた人々から金品を巻き上げにかかった[18]。発電室の破壊も行われた[19]。武装集団のうち２人は司教館に向かった。スフラーフェン司教を呼び出し面会すると、金銭を要求、部屋を物色してすぐ立ち去った[20]。

司教はじめこの後拉致されることになる９人の欧州人と、多数の中国人司祭と修道士が食堂で夕食をとっていた19時過ぎ、武装集団は突如乱入し、その場にいた全員を起立させ、司教が目的を尋ねるのも無視して欧州人の拘束に取り掛かった。賊は予め捕虜を縛るロープを用意していたが、足りなくなると食卓のナプキンを割いて使用した[21]。中には欧州人と間違われた中国人もいたが、誤解が解けると釈放された[22]。そして犯人自ら、目的が欧州人であることを告げているのである[23]。この時点で動機はともかく、外国人である欧州人宣教師の拉致が目的であったことは、動かしようのない事実であることが分かるだろう。婦女子を拐かしに来たわけではないのである。

ここで犯人の集団は三手に分かれた。司教ら欧州人捕虜を連行する組、会計係であったベルトラン神父の部屋にある金庫を狙う組、そして欧州人修道女がいた尼僧院（愛徳姉妹會）を目指す組である。賊はそれぞれに中国人神父を案内に立て、彼らに欧州人から金銭を巻き上げさせたり、会計係の部屋の窓を破壊させたりしたが、尼僧院では賊自ら応対した修道女に銃口を突きつけて脅したので、開門させることに失敗した[24]。もちろん、正門同様工夫すれば侵入することは十分可能であったはずだが、結局そうすることはなく諦めて引き上げている。犯人たちは９人の欧州人男性の捕獲と金品の強奪、発電室の破壊で、一応満足したということになる。

最終的にこの小武装集団は正門に集結し、問番小屋に監禁していた２人のフランス人神父を捕虜に加えて闇に消えた[25]。これを追跡した者はおらず、その後の被害者がどういうことになったのか、明確に知るすべはなかったのである。

拉致されたのは以下の９名である。

ラザリスト

・フランス・スフラーフェン司教（Frans Schraven、オランダ人、63歳）
・リュシアン・シャルニ神父（Lucien Charny、フランス人、54歳）
・トマス・チェスカ神父（Thomas Ceska、オーストリア国籍のクロアチア人、65歳）
・ウージェーヌ・ベルトラン神父（Eugène Bertrand、フランス人、32歳）
・ヘリト・ヴァウタース神父（Gerrit Wouters、オランダ人、28歳）
・アントン・ヘーツ修道士（Antoon Geerts、オランダ人、62歳）
・ヴラディスラウ・プリン修道士（Wladislaw Prinz、ポーランド人、28歳）

トラピスト

・エマニュエル・ロビアル神父（Emmanuel Robial、フランス人、52歳）

一般信徒

・アントニン・ビスコピッチ（Antonín Biskupič、チェコスロヴァキア人、51歳）

３．事件後

拉致があった翌日（10月10日）も宣教会での略奪が行われた。さらに夜には拉致実行犯の中でも主犯格と見られる男が現れた[26]ほか、欧州人が残っていないかどうか調べられており、２日間ともこの武装集団にとって目的が欧州人の拉致であることが明らかである。この日を最後に「兵士」たちの侵入と略奪は止んだ。これは11日以降宣教会正門前の民家に独立攻城重砲兵第２大隊が宿営し[27]、宣教会自体にも歩哨が配置された[28]ことによるものであろう。

12日には民間人の城門通行が許されて、郊外の小神学校長であったオランダ人のヤン・ラマカース神父（Jan Ramakers）が宣教会にやって来た[29]。彼は事件のことを知ると、病のため自室で食事をとって拉致を免れたアルベリック神父と共にしばらく尼僧院に匿われながら、現場にいた中国人たちから聞き取りを行った。また、代牧区内の宣教師に連絡を試みた。そして宣教会から正定治安維持会に対し正式に捜索願を出したが、これは10月15日のことであり[30]、拉致に対する速やかな初動対応があったようには思われないのである。拉致を免れた中国人神父などは、皆怯えきって為すすべを知らぬ有様であったというから、犯人たちは十分に脅しつけていたと考えて良いのではないだろうか。

10月22日になって、代牧区内にある定州から、主任司祭のシャネ神父（Louis Chanet）が正定に到着し、壊滅した宣教会運営の主要メンバーに代わることとなった。それだけでなく、神父は拉致被害者奪還のため、事件に関する情報を収集し、日本軍や布教保護国であるフランスの大使館に協力を求めて使者に書簡を託して派遣した[31]。また、正定郊外のトラピスト修道院（ノートル・ダム・ド・リエス修道院）でも、戦禍を避けるためラザリストの宣教会に避難させていた、フランス人のロビアル神父が拉致されたため、中国人修道士や使用人を使って情報収集を行わせた[32]。

遠く離れた北平や天津では、少なくとも22日には事件の第一報が伝えられ、フランス大使館から日本大使館へも通報された[33]。また、ロイター通信は24日に事件についての記事を配信した。在北平日本大使館の森島守人参事官は25日、匪賊による犯行と断定し

て、作戦中で余裕のない軍に代わって直接宣教会側が折衝できるようにするべきとの意見具申を廣田外相に行った[34]。

現地日本軍は、11月2日に憲兵隊が聞き取り調査を宣教会で行った[35]他、余裕がないながらも被害者の捜索に努力したようであるが、全く成果を挙げることができなかった[36]。また、地元に根付き、多くの中国人信徒を抱えるカトリック教会も、何ら手がかりを摑むことができなかった。犯人側からも身代金などの要求は一切なく、犯行の目的も、人質の安否も分からないまま、虚しく１ヶ月が過ぎ去った。

11月10日頃に突然、拉致された宣教師たちが皆殺害され、遺体は宣教会近くの仏教寺院で燃やされたという情報がもたらされ、12日に焼け跡付近で拉致被害者の身につけていたものや人骨、歯などが発見された。宣教会は事前に現場保存を治安維持会警察に要請したが実行されず、金目のもの欲しさの野次馬が群がっていた。宣教会から派遣された中国人使用人は彼らと争いながら遺留品や遺骨を取り戻し持ち帰り、シャネ神父とトラピストの小修道院長とで一つ一つ確認作業を行い、それらが拉致されたスフラーフェン司教たちのものであることが判明した[37]。そして被害者全員が殺害されたものと思われたのである。

同じ頃、日本側は教会側の要請を受けて、軍と共同で調査することを許可した。石家荘にある第１軍の上級司令部にあたる、北支那方面軍司令部報道部から、横山彦眞陸軍歩兵少佐（以下、少佐と略す）が調査及び教会との折衝の任にあたることとなり、共同調査の仲介を果たした田口芳五郎神父、天津司教にしてスフラーフェン司教の前任者であるド・ヴィエンヌ司教（Jean de Vienne de Hautefeuille）がこれに同行した[38]。田口神父は当時、日本カトリック新聞社社長であったが、支那事変における防共の意義を伝える使命を帯びて、この時横山少佐と同じ司令部に嘱託として赴任していた[39]。

横山、田口、ド・ヴィエンヌの３名は、拉致被害者が全員殺されていたことを知らずに天津、北平、保定と旅して、11月17日に正定に到着した。遺骨や遺留品を直に見せられた横山少佐は、ド・ヴィエンヌ司教に対して日本側の責任を認める発言をしたという[40]。既に少佐は10月末に北平で、在北平フランス大使館の事件担当者である、フランシス・ラコスト２等書記官（Francis Lacoste）と話をしているが、その時点において「朝鮮人あるいは満人の特殊な部隊」の可能性を示しながらも、日本軍の名誉の問題として捉えていることを述べている[41]。10月末というのは、前述の憲兵隊による宣教会調査よりも数日前になる。これは10月26日に現地からフランス大使館にもたらされた情報[42]と同じであるので、それについての見解を述べたに過ぎないかもしれないが、いずれにしても、少佐の姿勢は、日本軍が責任を持ってこの事件を処理することに最善を尽くすことを、関与する当初より決意していた模様である。

少佐の主導で正定において慰霊祭ともいうべきミサが準備され、11月22日にド・ヴィエンヌ司教の司式で執り行われた。これには方面軍司令官、寺内寿一大将からの弔電が届けられ、司令部からは花輪も提供された[43]。ミサにはカトリック正定代牧区の人々だけでなく、駐屯軍の将校たち、治安維持会の幹部たち、町の名士たちのほか、プロテスタント宣教会や仏教寺院からも多く参列するなど、盛大なものとなった[44]。

4．事件処理交渉

正定でのミサの後、ド・ヴィエンヌ司教は単身、北平を経て天津へ戻った。北平ではラコスト書記官に口頭で日本軍が責任を認めた旨の報告をした。30日には文書で事件の報告をした[45]が、日本兵の犯行としながら日本政府が強硬に認めていないことも記しており、日本側の反応には統一したものがなかったか、あるいは誤解を招く曖昧さがあったと言える。また、日本軍の責任に関する確かな根拠と詳細な調査結果を、急ぎフランス大使館に出すよう求められたド・ヴィエンヌ司教は、結局その後文書で回答することがなかった[46]。これらの点が事件処理交渉をより複雑にし、長引かせることとなった。

ド・ヴィエンヌ司教と別れて、田口神父と山西省のカトリック教会への防共宣伝と視察に向かった横山少佐は、12月に出張から戻って天津でシャネ神父と交渉に入った。教会側からは具体的に以下の要求がなされた[47]。

（1）北平の公使館地区でミサを行い、これに日本軍と日本大使館から人を出席させること。

（2）正定に慰霊碑を建て、碑文を日本軍の名で刻むこと。

（3）15万中国ドルを基礎とする賠償金を支払うこと。

（4）正定宣教会に対して弔文を出し、これを公表すること。

これに２点追加されている。

（5）フランス大使館はじめ被害関係国公使館に対し、日本軍高級将校が公式に謝罪訪問を行うこと。

（6）日本政府または日本軍より、公式謝罪文を東京の教皇使節を通じてバチカンへ送ること。

これを受けて横山少佐は、12月14日に軍としての回答をシャネ神父に提示した。森島参事官にもコピーを渡し、関係各国の外交使節長に手交するよう依頼した。回答の内容は（1）（2）（4）項については了承、（3）項は検討の用意有り、（5）項は公式謝罪を公式弔問に変更、（6）項は拒否、というものであった[48]。

しかし、拉致殺害実行犯の検挙や処罰については全く言及されておらず、事件そのものが説明されないままであったので、フランス、オランダの外交担当者は強く反発した。さらに森島参事官が、横山少佐から依頼された軍の回答文書をフランス以外のオランダ公使館ほか関係国に配布しなかったこと、12月18日の北平でのミサに、時間を間違えたという信じられない理由で参列しなかったことが、火に油を注ぐこととなった。軍を代表して横山少佐はフランス大使館に弔意を表しに訪れたが、ラコスト書記官は謝罪なしの面会を拒否している。続いて森島氏が訪問し、ミサ不参加を詫び、「謝罪」ではなく「遺憾」での解決を求めたが拒否された[49]。

森島参事官と横山少佐はその後天津へ赴いた。善後策について北支那方面軍と協議したと考えられるが、数日後北平に戻って（横山少佐は陸軍省や憲兵司令部に事件の説明報告を行うため帰国した）も、フランス大使館やオランダ公使館に対し何の連絡も取らなかった。業を煮やしたオランダ公使デ・フォス・ファン・ステインウェイク男爵（Godert Willem de Vos van Steenwijk）とラコスト書記官は、新たに（A）正定における公式調査の

報告、(B) 軍の謝罪と犯人の処罰、及び再発防止の保障、(C) シャネ神父が提案した15万中国ドル (約15万日本円) を損害賠償の最低額とする、以上３点を盛り込んだ対日覚書を用意し、本国に承認を求めた[50]。

この覚書はすぐ日本側に出されることはなかった。年明けにフランス政府がラコスト書記官に伝えた訓令は、これまでの強硬な姿勢から一転して妥協的なものに変化していたからである。軟化した理由はオランダ側に説明されず、憤懣やる方ない公使はフランスに配慮して修正した独自の覚書を日本大使館に手交した[51]。

1938年1月14日、森島参事官は在北平オランダ公使館を訪問し、12月14日付の教会側の要求に対する軍の回答文書の写しがオランダ側に渡されなかった点と、ミサ欠席について釈明し、事件については、日本兵の犯行と証明するものが何もないが、日本軍占領地での被害であるので「遺憾」を表明するに留まる旨明言した[52]。

1月27日には今度はラコスト書記官が覚書を出して、日本大使館で日仏間の交渉を行った。覚書で謝罪と再発防止保障を挙げたが、訓令に従って無理押しすることなく、謝罪を「深い遺憾」に変更することで森島参事官と合意した。損害賠償も要求したが、交渉の結果棚上げとなった[53]。この合意に基づいて、日本から戻ってきていた横山少佐が、翌28日にフランス大使館を訪れて、公式に軍を代表して深い遺憾の意と再発防止保障を表明した[54]。29日にはオランダ公使館でも同様の表明をしたが、デ・フォス・ファン・ステインウェイク公使は、少佐に椅子も勧めず、事件発生から３ヶ月たっての表明に遅すぎると批難した。横山少佐は、正定を占領した第６師団がすぐに上海戦線に転用されて調査が困難になったこと、実行犯は日本軍より武器や軍服を支給された中国人であること、日本軍として防共で共通するカトリック教会に対し、敵意ある行動を取ることは断じてないと主張した。損害賠償の話について公使が質すと、横山少佐は回答に躊躇した後、既に宣教会側と直接解決したことを明かした[55]。

実は、２日前に少佐は北平の駐華教皇使節館[56]を訪れて、コミッソ秘書官 (司教相当) に見舞金９千円、北支カトリックの宣教・慈善事業に対する寄附金１万５千円を渡していたのである。秘書官はフランス大使館、オランダ公使館、そして正定宣教会を代表しているシャネ神父に何ら相談することなく、これを受け入れてしまっていた[57]。

これは本来、損害賠償に関する交渉は布教保護国フランスが行うのが慣習であったが、正定事件の場合、正定宣教会の代表者であるシャネ神父がフランス大使館と連絡を保ちながら日本軍代表者の横山少佐と行った。しかしながら、ここで外交権を有しないはずの宗教上の上位機関、しかもその秘書官がほぼ独断で「直接解決」したのである。

ザニン教皇使節もコミッソ秘書官もイタリア人である。北平、天津司教はフランス人、シャネ神父もフランス人である。また、バチカンは布教保護国より外交権を取り戻す意欲を持っていた。かつてこれに強く抵抗を示したのはフランスである[58]。史料からは、教皇使節館による突然の介入についての明確な理由を見つけることはできないが、いずれにしてもカトリック教会側が一枚岩でなかったのは確かである。

そして日本側もまた同様であった。横山少佐は中国側のプロパガンダを抑える任務を有して北支那方面軍司令部に派遣されていた。おそらく満洲事変の際に関東軍司令部報道課で、得意のフランス語を駆使して欧州人との人脈を築いたり、中国側の宣伝資料を収集したりしていたことが買われたものと思われる。正定事件ではカトリック宣教会の被

害に同情し、誠実な対応を取っていたことが宣教師たちから高く評価されている。12月14日の合意文書を見ても、概ね宣教会側の要求に応えており、方面軍参謀長岡部直三郎少将が示す方針[59]にも合致していた。

ところが、司令部内から支払う金額を抑えようとする声が出た。これは日本軍の直接関与した犯行と、軍も大使館も認めていないことと関係があるのだろう。3月6日にド・ヴィエンヌ天津司教を訪ねた横山少佐は、渡した２万４千円が北支カトリック全体でなく正定のためだったということ、コミッソ秘書官が自分の伝えたことを理解しなかったこと、金額については土壇場で、ある将校が主導して減額したことを語り[60]、3月18日には森島参事官がラコスト書記官に対し、横山少佐の司令部内における立場が弱くなっていることを告げている[61]。

1938年2月13日、日本大使館の森島参事官は、支那事変における第三国人の人命と財産を保護する軍命令の実施状況と、正定事件に関する責任問題について、正式にフランス大使館に通知した。ここで拉致殺人についての日本軍による責任を明確に否定している。また教皇使節館へ弔慰金および寄附金の支払いが行われ、宣教会側の満足を得たことも伝えられた[62]。

フランス大使館と、オランダ公使館は、棚上げにした賠償問題がいつの間にか解決された形になっていることに驚き、本国からの指示を仰いだ上で支払金額増額についての再交渉を開始した。布教保護国の面子を秘密外交で潰され、賠償額も期待していた額に比べて余りにも少額過ぎたからである。両者はこの際、正定宣教会建造物の砲撃被害、略奪等の物的損害賠償の増額のみに集中することにし、調査結果の公開や犯人の処罰など日本側の責任を問う覚書の項目は放棄することにした。被害者である宣教会から日本軍の犯行を決定づける根拠の提示がなく、既に日本側より名目はどうあれ金銭の支払いを受けていたので、これ以上責任問題に触れることは、賠償金増額、即時支払要求の達成は不可能になることが明白だったからである[63]。

最終的に4月12日、森島参事官は新たに物的賠償約１万５千円、正定宣教会への寄附金約１万円、及び慰霊碑建立費用約１千円を（中国ドルで）支払い、これをもってフランス、オランダ両政府は幕引きとすることに合意したのである[64]。

５．真犯人と動機の考察

実行犯の考察

スフラーフェン司教ら欧州人の拉致殺害について、真犯人が誰であるか、またその動機が何であったかを、明確なものとする史料は現在のところ発見されてはいない。しかしながら、当時、真犯人が最後まで判明せず、事件から日が経ち、事件処理が順調に行かなかったこともあって、海外史料では日本軍の犯行と記述するものばかりになっていったこともまた事実である。

拉致発生時には目撃者が多くいたにも関わらず、残された中国人神父や修道士たちは、筆者からすれば少々疑問ではあるが、犯人たちの国籍や民族、どこの集団に属しているかさえはっきりと判別できなかった。しかし、中国軍の正定守備隊が敗走し、日本軍が入城した後のことであれば、日本兵でなくとも、この武装集団が日本軍に認められ合力し

ていた兵士たちであったと推測する他なかったのではあるまいか。トラックを使用した点や町の主要道路へ捕虜を連れたまま出ていった点も合わせて、宣教会、フランス、オランダが支持する広義での日本軍犯行説の要素となっている。満人、朝鮮人、モンゴル人などの可能性が指摘されているものの、いずれにしても日本軍の一員、あるいは雇用、庇護下にあった、という考えである。

自然な考え方ではあるが、全員が殺害されたことが決定的となる以前は、証言を取りまとめて記録したシャネ神父は日本軍犯行説に慎重な姿勢を取っていた[65]。しかも宣教会側は日本軍に対し、拉致被害者の返還ではなく、捜索を依頼[66]しているし、宣教会の警備も軍から受けている。ロビアル神父を失った正定郊外のトラピスト修道院でも、近くの鉄道警備をする日本軍の存在を有難がり、自衛用武器の支給を願い出ることまで考えていた[67]。事件が起きた同じ日には、トラピスト修道院に日本軍１個中隊ほどが宿営したが、将兵は問題も起こさずにお金を払い酒の差し入れまでしたので、宣教師たちは好意的評価を下している[68]。少なくとも殺害されたことが分かるまでは、日本軍犯行説は関係者の記録からは出てきていない。

犯罪時を振り返ってみると、犯人たちは10人程度の集団で、主要武器は拳銃、しかも統一されてはいなかったらしい。日本軍の軍服を着ていたと言われているが、民間人の帽子を被っていた者もあり[69]、その外見は日本の正規兵と見なすのは困難と言える。

次に彼らは午後６時頃から午後10時半頃まで宣教会に居座った[70]。さらに９人もの成人男性を拉致し、殺害し、おまけに焼却したのであるから、武装集団はこのために少なくとも半日以上かけている。また、翌10月10日夜にも宣教会を襲って略奪し、西洋人を探している[71]。日本軍は９日に入城したものの、10日に予定されていた滹沱河敵前渡河のために全力をあげていた。南北を貫く主要道路は、軍の車列で大渋滞を起こし[72]、砲兵部隊は次の陣地に向けて移動していた。このような状況で、長時間略奪や第三国人に対する違法行為をする余裕と必要が日本軍にあったとは考えられない。

主犯格の男は流暢な中国語（北方官話）を話したが、他にも数人中国語を話したものが確認されている。熱河訛りがあったとする記録もある。これは自らを満洲馬賊「紅鬍子 “Houng Hou Dze”（直訳で赤ひげ、北方騎馬民族の略奪者に由来する馬賊の意）」であると語ったという、ジェラルダン小修道院長やラマカース神父の報告[73]と関連付けることができ、満人とする記録とも一致する。50頭の馬を宣教会内に二晩繋いでいたという記録[74]もあるので、馬賊の可能性は十分高い。

そして事件を調査した横山少佐自身が、オランダ公使に対して日本軍より制服・武器の支給を受けた「中国人Chineezen」による犯行であったことを述べているのである[75]。この証言に従えば、実行犯は日本軍に味方、あるいは雇用された満洲馬賊ということになるが、それでは日本側の公式記録と矛盾する。

日本側の公式記録は以下のものである。北支那方面軍の外交事項調[76]では正定宣教師遭難事件は「共産匪ノ為殺害サル」、外務省の『支那事変ニ関連スル在支第三国（英米ヲ除ク）財産被害調査表』[77]には「満洲軍ニヨリ殺害」と記録され、憲兵隊は「中国軍敗残兵」とし、森島参事官も憲兵隊報告を覆すものがないとしている[78]。これらを全て自らの責任を否定するための捏造と考えるのは早計である。

まず、「共産匪」という軍の見解についてだが、犯人を捕えることができなかったことや

類似事件から強く推測したものと考えられる。横山少佐が10月末時点においてラコスト書記官に対し、また、11月22日の正定でのミサにおいて、断言ではなく推測でしか言及していないこと、現地に根付いたカトリック教会側も全く情報を摑めていないことから、例え日本軍側にいた武装集団であっても、犯行後に正定から逃亡した可能性が非常に高いと言える。そして、正定でのミサの後に少佐が「共産主義者」の可能性について言及していること[79]や、その後すぐに北平に戻らず、田口神父と共に山西省で共産党によるカトリック教会の被害を視察している[80]ことから、彼が属した北支那方面軍では共産匪の犯行という結論に達したと考えられる。また、最後に宣教会で実行犯が目撃された翌日の10月11日には、正定西北約45kmにある霊寿縣馮家荘の教会において共産匪12名の襲撃があり、略奪の他、モレリ神父（Alphonse Morelli）とローラン神父（Georges Rolland）の２人の欧州人拉致未遂事件が起きている（13日には40名を超す仲間を集めて再び現れた）。正定で起きたこと同様の事件が、近くで立て続けに、しかもほぼ同じ人数の集団によって起こされたのである。モレリ神父は教会の情報網を使って、犯人が共産軍に合流した匪賊であることをつきとめている[81]。この事件は日本にも伝えられているので、当然軍も把握していた事件であろう。

外務省が記した「満洲軍」についてだが、現代人からすると非常に曖昧で分かりにくい。しかし、張学良の東北軍系部隊の将兵と考えるのが妥当であろう。実際、北方から敗走してきた萬福麟（Wan Fulin）の第53軍、馮占海（Feng Zhanhai）の第63軍が正定周辺の守備についており、捕虜も出している[82]。また、事件当初から教会側の史料に満人兵が登場することや[83]、満洲馬賊と自ら名乗った報告[84]があることから、日本側だけが特別に意図して使用したものとは考えにくい。

憲兵隊が推測し、森島参事官が支持した中国軍敗残兵説については、宣教会があった地区に、日本軍入城後も軍を脱走した敗残兵が相当数潜伏していたこと、事件現場に青龍刀や日本軍が使用しないダムダム弾を残置していたこと[85]を根拠に挙げていて、森島参事官は、日本政府の事件に対する最終見解を示した文書を出した1938年2月に至るまで、憲兵隊の推測を覆す決定的証拠を何人も提出できなかったことを指摘している[86]。

これら３種類の見解、表現の相違には、日本の縦割り行政の派閥主義の弊害が見られるかもしれない。しかし、これらの見解は総合することが可能である。いつの時点であるか判定するのは困難だが、元来満洲馬賊であり、かつ旧東北軍系部隊でもあった敗残兵あるいは脱走兵の一団が、正定攻略前後の段階で日本軍の軍門に降って、一時的に縣城内の治安維持にあたっていた。そして彼らは共産党に親近感を有しており、宣教師らを拉致殺害した後に八路軍の拠点に向かって逃亡したという筋書きである。これならモレリ神父がつきとめた自分たちを襲った共産匪が、晋察冀辺区（山西省、チャハル省、河北省が接し合う地域に設置された共産ゲリラの根拠地）の中心となる阜平に向かった話とも無理なく繋げることができる。また近隣の縣でも共産匪による拉致事件が頻発していた[87]。

旧東北軍は、張学良の下で陝西省の共産軍を包囲していた時分に、密かに敵である共産党と連絡し、赤化工作を受けていたことがあった[88]。馬賊や匪賊が軍に転籍することもざらにある。日本軍は少なからず捕虜を取ってもいた。難しいのは捕虜や寝返った将兵を武装させて治安維持に任じたかどうか分かる史料がないことである。正定の暫定行政機構である治安維持会の会長を務めた呉贊周（Wu Zanzhou）は、治安維持に馬賊の使用が

必要であると日本軍に提案していた事実[89]から考えてあり得ることではある。しかも、石家荘では馬賊の使用が認められた[90]のに対し、正定では却下されている点[91]を見れば、宣教師拉致殺害という失態によって許されなかったのではないかという推測もできる。

治安維持会の関与あるいは情報の隠蔽の可能性は、トラピスト修道院のジェラルダン小修道院長から宣教会のシャネ神父宛に出された書簡から見出すことができる。それは、事件から１ヶ月もの間全く手がかりがなかったところへ、突然呉の周辺から拉致された司教たちが連行された後すぐに殺害され、正定周辺で埋められたという情報が出たことである[92]。これは不自然なことではないか。何も情報がない期間があったということは、誰も知らなかったか、知る者が黙っていたかである。偶然遺体を発見したのではなく、殺害されたのが拉致直後、つまり、10月9日当日か、その数日内に殺人があり、埋められたという情報通り（事実、埋められていた）とも思える結果がもたらされたということは、知る者が口を開いた可能性が高くなる。しかもそれが行政組織の頂点の周辺から出てきたのである。

フランス外交史料館Centre des Archives diplomatiques de Nantesの史料では、プロテスタント宣教師が宣教会の西隣にある天寧寺の敷地内に焼かれて埋められたことを誰からか聞かされていて、11月12日にカトリック宣教会から人を出して掘り返してみると、行方不明になっていた欧州人の特徴ある所持品などの遺留品、遺骨や歯が発掘されたとある[93]。宣教会は捜査の定石である現場保存を警察に念押ししたが、驚くべきことに何の対応も取られずに、翌日には野次馬が目ぼしいものを探して現場を掘り返していたのである[94]（宣教会の中国人使用人が取り返した）。

最終的に天寧寺に埋められたことや、遺体が焼却されたことは、発掘されたものから間違いがない事実ということができる。しかし、同じ場所で殺害がすぐ行われ、焼却まで連続して行われたかどうかは確かなことは分からない。９人の遺体は全く原型を留めておらず、収集された遺骨の写真を見ても、相当念入りに焼却し、骨を破砕したと見られる。野外において、それも天寧寺という正定市街の中心において、少なくとも半日近く焼却による遺体隠滅作業を行うことは極めて難儀なことであり、犯人が相当な動機と意思を持っていたと考えざるをえない。

動機の考察

続いて動機の面から実行犯について考察する。正定事件をめぐる歴史認識問題で一番重要な点はここにある。最初の段階として、財団説でいわれている、宣教会から女性を慰安婦として提供するよう日本軍から要請があったのかどうか、これをスフラーフェン司教はじめ欧州人宣教師が拒否したことが、実際に行われたかどうか、行われたとしたらそれはいつ行われたのか、まず検証してみる必要がある。

財団説は、バチカンに提出された報告書を外部の者が読むことができないため、一般にはスフラーフェン財団ホームページ内に掲載されている”The drama of Zhending, 9 October 1937”という題名の出典が全く記述されていない概要[95]と、事件を題材にした漫画[96]（５ヶ国語に翻訳）によってしか直接確認することができない。筆者は2018年12月にオランダで、直接財団や教会関係者と接触して主張の根拠史料の提示を求めたが、所有する史料は全てバチカンに送付され、コピーすら無いということであった。

その後、フランス・ラザリストのアーカイブで財団が入手した史料のリストが判明し、フランス、オランダの外交文書、入手済みの修道院史料に加えて、財団が手に入れた以上の関係史料から財団説の決定的な根拠を探した。しかしながら”The drama of Zhending, 9 October 1937”で、トラピスト修道院長の報告書に述べられている「日本兵が金と女を要求した」という部分は、正確には「満人たちdes hommes de Mandchourie」によるものであった[97]。プロテスタントのヒル牧師がオランダ公使館に報告した文書では、「日本兵the Japanese soldiers」となっているのでそのまま引用されている[98]。しかしこれは牧師が後日（史料では数日後だが、概要では事件後すぐにとなっている）中国人から仄聞した情報であり、午前か午後に外国人宣教師が日本兵の若い女性を求める要求を拒否し、兵士たちがそのまま立ち去ったことが書いてあるだけである[99]。そこで交わされた言葉は史料に記述がないが、”The drama of Zhending, 9 October 1937”では宣教師の勇ましい台詞（「私を殺したいなら殺せばいい、だがあなたが求めるものは決して渡せない」）が書かれている。

オランダ公使館ではこの件が殺人に繋がったと見なかった。ヒル牧師は推測を述べて日本軍の犯行であることを強調したが、誰も目撃者を挙げることができず、探すことが困難であることを認め、報告の慎重な扱いさえ申し出ている始末である[100]。また、カトリック教会側、特に事件の情報を収集、取りまとめたシャネ神父やラマカース神父、連絡を密にしていたトラピストのジェラルダン小修道院長、共同調査にやって来たド・ヴィエンヌ司教のいずれも女性問題を犯罪の動機とする説を推測ですら記録していないのである。シャネ神父などは、”The drama of Zhending, 9 October 1937”にあるように、主任司祭を務めていた定州の教区で、近郊の中国人信徒が持ち込んだ日本兵が女性を要求したという話をよく確かめもせず、すぐさま駐屯する日本軍指揮官に対して抗議文[101]を出すような人物であったにもかかわらず、正定では全く抗議も記録もしていないのである。プロテスタント宣教師に告げた中国人はカトリック宣教会の人間であったので、当然責任者のシャネ神父に報告して然るべきものである。しかし、実際には10月22日より正定にいるシャネ神父でもなく、11月2日にやってきた憲兵隊でもなく、調査とミサを行った横山少佐やド・ヴィエンヌ司教でもなく、２ヶ月近く経った12月1日になって、正定でなく北平のオランダ公使館においてヒル牧師は報告したのである。極めて不自然であり、女性要求に端を発する説が日本に批判的態度を取っていたオランダ公使館にすら相手にされなかったのも無理はないように思われる。

事件の詳細を見ても分かるように、たとえ明るいうちに女性要求があったとしても、わずかに中国人の尼僧院に侵入を受けたのみで、宣教会内で女性の被害は全く無かった[102]ことは明らかである。食堂でも犯人は目的が欧州人であり、中国人が標的でないことを知らせているし、その行動は冷静そのものであり、怒りによる激情に基づく犯行であるようには到底思えない。確かに彼らは中国人神父に命令して欧州人から所持金を巻き上げたり、会計係の部屋に押し入って金を盗んだりした[103]が、結果的に身代金要求をせず、被害者の所持品には手を付けず、発電室を破壊する[104]など、遺体の処理に時間をかけて行っている点も含め、単なる敗残兵や匪賊の類とは異なる動機を有していたと見るのが自然ではないだろうか。

特に筆者が注目している点は、遺体の焼却である。犯人はただ捕虜を殺害するだけで

なく、９人もの成人男性を、専用施設も用いずに焼却し埋めたのである。これには大変な労力と時間がかかる。拉致、移送後すぐに作業を開始しても、夜の間にほとんど骨を残さないほど徹底して焼却するのは不可能であろう。近くには縣城内を南北に貫く道路があり、日本軍の車列が夜通し渋滞を起こしているのに、市街の中央で、昼近くまで人間を焼く余裕が犯人たちにあったであろうか。日本軍の総攻撃は午後１時であり[105]、各部隊準備に余念がない中、将兵の近くで強い異臭を放つ野焼きができたとは到底考えられない。規則でも市街や軍が駐屯する場所、飲用の井戸から離れた場所で火葬することを定めている[106]ので、天寧寺で人間を焼けば、すぐに誰かが駆けつけた可能性が高いだろう。

前述のように、火葬習慣を持たない満洲出身の馬賊が、堂々かつ手際よく野焼きできたとも考えにくいのだが、ド・ヴィエンヌ司教がフランス大使館に出した報告では、天寧寺内の空き地に焼き場跡が３つあり、そのうち２つが軍人用、１つが宣教師用であったと述べている。その根拠や詳細な情報は分からないが、そこから遺骨や遺留品が発掘されたのは確かな事実である。しかし、発掘された頭蓋骨はわずかに１つ、他の骨も若者３人を含む成人男性９人分には少なすぎる「いくつかの骨」と灰しか見つからなかった。丁寧に骨を突き崩して灰にしても（これも時間のかかる作業である）、相当な量になるはずであるが、報告の記述にしても、残された記録写真にしてもどうしてこれで全員分と納得できたのか理解し難い少なさなのである。拉致被害者が殺害、焼却されたのは、むしろ別の場所、城外の目立たぬところであったとするほうが自然ではないだろうか。

事件から１ヶ月情報が出てこなかったことと、突然大きなヒントとなる情報がもたらされたことと関係があるのかも知れない。つまり、殺害現場から遺骨や所持品をまとめて宣教会の近くで人気がない天寧寺に運べるだけ運び埋めた時に目撃されたか、噂が流れた、あるいは情報を流したことも考えられる。

犯人たちは中国人尼僧院に入ったが何もせず[107]、欧州人尼僧や女性の避難民が多く匿われている区画には立ち入りもしなかった[108]。殺害するだけでなく、時間と手間をかけて遺体を処分するほどの怒りや恨みが、女性獲得の誘惑を忘れるほどのものであったとするのは説得力に欠けるだろう。犯行２日目の10月10日に、犯人たちが宣教会で略奪の他、欧州人のみ探し、女性には全く手出ししていないところを見ても、女性獲得の障害であった欧州人宣教師の排除に何の意味もないことを証明するものと考えられる。

そもそも、前線の将兵が、自らの宿舎も用意できず、食料も十分に補給されていない中、200人もの女性を慰安婦に強引に駆り出そうとするのも全く現実離れした話である。このような人数を駆り出すのは少人数の独断ではあり得ず、何らかの指示によるものであるはずなのに、犯人たちは目的を達せず、宣教師の殺害と遺体の処分に力を注いでいるのである。

これに対し、財団説が提示する根拠は全く不十分である。引用されているいくつかの証言は全て現場にいなかった者の推測や仄聞した情報であり、被害者である宣教会側の主要人物によって記録されず、日本に賠償を迫るフランスやオランダが、交渉を有利に進める情報として利用しなかった事実は、その何よりの証しであると言えるだろう。

以上の点から見てこの事件は、日本軍が知らない土地に入った初日に、宣教会に婦女子が多く避難していることを嗅ぎつけ、その引き渡しを要求し、拒否されたことを理由に、その日のうちに第三国人を殺害するような短絡的行動に出た、というような単純な話

ととらえることはできない。地元の有力者が組織した治安維持会の関与の可能性、欧州人のみが狙われたこと、身代金等拉致後に犯人から要求がなかったことなどから、より複雑な背景、あるいは思想的背景があったものと推測される。

前述の通り、共産主義者が犯人であったとすれば、拉致が起きる数時間前、日本軍将校団が視察と表敬に宣教会を訪れた時に、反共で志を同じくするカトリック教会を日本軍が保護する旨の演説が行われた[109]。これにより、漢奸と見做された外国人宣教師が、帰順馬賊の皮を被った共産匪の標的となり、処刑した後正定から逃亡し、共産軍の根拠地に向かいつつ同様の事件を引き起こした可能性を考えることができる。共産党は漢奸を火刑に処すことを命じている[110]のも考慮に入れておきたい。類似事件[111]もあり、共産匪の思想的犯罪説はより説得力を持つのではないだろうか。協力あるいは指示する立場にあったと考えられる治安維持会は、責任を回避するため沈黙を守りつつ、ほとぼりが冷めた頃に情報を流した、とするのがこの場合自然だろうか。

または、以前より信徒でない地元の中国人と外国人宣教師との間に問題や遺恨、政治的対立などがあった可能性はどうであろうか。10月26日付のジェラルダン書簡では、この時点で動機が復讐であると考えられていたことが覗える。その容疑者として「萬福麟の軍人たち」、「宣教会に不満を抱く中国人」、「仏教徒」が挙げられている[112]。萬福麟は先に述べた旧東北軍部隊を率いた軍閥将軍である。支那事変が勃発した7月以来、正定周辺には絶えず軍隊の往来があり、付近は防御のための陣地造営が進められたが、事件までの数ヶ月の間あるいは戦闘中に何らかのトラブルが両者にあったのかもしれない。宣教会に対する不満は宗教上の理由や、経済上の利害関係、土地等の所有権争いなどが考えられる。また個人的な問題として、スフラーフェン司教は普段、町の一部有力者たちから自ら望んで孤立し、特定の人々には態度が冷たくすらあって、敵のような存在があったことが他の宣教師により指摘されている[113]。仏教徒については、義和団事件の際に正定に進軍してきたフランス兵が現地の仏教徒を虐殺したという話を元に復讐の動機がある者に加えられている。

現在確認されている史料は、当時事件の調査や処理にあたった人物の主要なものをかなり網羅できている。オランダのスフラーフェン家などに伝わった個人的書簡などは確認できていないが、これまで考察してきたことだけでも、冒頭で述べたように真犯人の確定が困難であり、動機もまた正確なことは分からないと述べる他なく、財団説のような根拠薄弱で推測を膨らませた主張がそのまま歴史的事実であるかのように宣伝され、バチカンで列福審査の対象となっていることは極めて遺憾であると言わざるを得ない。

6．現代の顕彰活動と列福審査

第２次世界大戦後の1946年5月に、カトリック系の新聞『益世報』[114]で正定事件について連載があり、財団説の原型が既にそこに出来上がっていた。記事を書いたのは笠原という人物で、その正体は不明であるが、日本側と宣教会側の交渉内容まで記述されているので、しっかりと取材を行っているようである。しかし、300人の婦女子を慰安婦として徴用しようと日本軍が要求し、その拒絶が犯行の動機になったというのは、前項で考察した通り、根拠薄弱で誇張に満ちたものである。記事が出たのは正定を攻略した第６師団長

谷寿夫中将が日本で逮捕された後だが、南京の法廷で正定事件が取り扱われることはなく、その後の共産化、外国人宣教師の追放などで次第に歴史に埋もれてしまった。

国共内戦を経て、宣教会は台湾に退避し、敷地や建造物は接収された。現在は人民解放軍病院となっている。その敷地の中に日本軍が建てた慰霊碑が今も残っている。碑には被害者の名前と共に「善牧為羊捨命」と刻まれている。当然誰によって何のために命を奪われたかは記されていない。2014年には新たに旧宣教会跡地に石碑が立てられ、除幕式にはオランダの財団関係者が参加している。

筆者がオランダで取材した、ラザリスト修道院の元オランダ管区長ベルマーカース師（Wiel Bellemakers、財団概要の共同著者でもある）は、この日本軍が建てた石碑を現地で見た。そしてこれこそ、自らの責任を認めた証拠として譲ることがなかった。既に80を超える老人で、幼いときよりオランダ南部の田舎の教会でスフラーフェン司教たちの悲劇を聞かされて育ち、神学生時代には中国より帰還した宣教師からも話を聞いていた。彼にとっては外交史料などよりも、現地を知った生の声のほうが信用できるのだろう。しかし、オランダでは事件後の報道は一貫しておらず、1938年のオランダ・ラザリストによるラジオ説教集では、被害者を殉教者として扱っているが、犯罪が「日本人に偽装した中国人Chineezen die zich als Japanners」によって起こされたと語られている[115]。

ベルマーカース師によれば、正定事件が再び顧みられるきっかけとなったのは、1990年代後半に台湾へ避難したラザリスト修道院に招かれた折、スフラーフェン司教たちを福者にしたいということで、調査と申請の労をとることを依頼されたことである。これが今日の列福問題の始まりであった。しかし、当時彼はまだ現役で、研究調査する時間も協力者もなく、長いこと放置されることとなった。

今世紀に入り、スフラーフェン家に連なる人たちが定年退職したことで、司教らの功績を研究することが可能となり、正定事件被害者の顕彰活動と婦女子や難民を守る目的としてスフラーフェン財団が2008年に設立されたのである。

研究を推進したのは現在財団事務局長を務めるヴィンセント・ヘルマンス氏[116]（Vincent Hermans）とその妻であった。彼らが収集した史料の研究成果が“The drama of Zhending, 9 October 1937”という概要となり、財団ホームページに掲載され、中国語や英語にも翻訳されて広く伝わることとなった。引き続き財団は時間をかけて研究を進め、2012年10月には殉教75周年のミサとイベントを行い、ローマ教皇庁福音宣教省次官（中国人）も出席した[117]。日本からも当時日本カトリック教会司教協議会会長であった、池長潤大司教（現名誉司教）の代理として深水正勝神父が派遣され、日本カトリックとして謝罪する文書を代読している。この公式な文書は、英語版とオランダ語版が額に入れられブルクハイゼンフォルスト教会に掲示され続けている。この教会は司教の故郷にあり、教会の片隅に記念する資料が展示され、ボランティアの手による壁画パネルも設置されている。描かれている絵には、婦女子を守らんとする宣教師たちが両手を広げて兵士たちに抵抗している姿もあり、当然のことながら財団説を下敷きとした殉教物語を伝えているのである。

列福の審査はまずオランダ・ルールモント司教区内、パンニンゲンのラザリスト修道院に設置された特別委員会で2013年3月に開始され、2014年4月に一次審査を通過した報告書がバチカンへ送付された。ローマ教皇庁はこの申請に対し、2015年3月に列福審査

を正式に認可した。バチカンの審査官はその内容を吟味し、枢機卿会議に提出する報告書を書かねばならない。外部からは審査の方法、進捗状況は全く覗い知ることはできないが、反論するとすれば、審査官が報告書を書き上げる前に学術的見地によってなされなければならないだろう。

列福運動というのは、この報告書だけで成り立つものというわけではないようだ。殉教者などの申請対象となっている者を崇敬し顕彰する活動、特に記念教会堂の献堂や顕彰碑の建立、対象者のためのミサの実績などで運動を盛り上げることも大事な要素であるように考えられる[118]。

本件でも、オランダ・ルールモント司教区は毎年10月9日前後に記念ミサを行い、財団も主導してブルクハイゼンフォルスト教会を記念教会堂に改装し、スフラーフェン司教の生家など関係施設を訪れる巡礼ハイキングなどのイベントを定期的に行っている。スフラーフェン司教の名を冠した通りもでき、極めて異例なことだが、標識には日本軍により虐殺されたという説明が付けられた。バラの新品種名にも使用され、村内の花壇に説明板が地元の観光局により設置されたが、当然財団説を採用している。また、中国からの訪問団を頻繁に受け入れ、交流を深めるなど着実に手を打っている。

筆者が2018年12月に財団関係者に取材した時点では、財団が根拠とする史料の詳細はほとんど分からなかった。財団説の概要はホームページに掲載されているものの、出典が示されておらず、販売している漫画も同様であったので、こちらで把握している史料にない情報の根拠を知るすべはなかった。オランダで彼らと直接対峙して問い質しても、根拠の提示は拒否された。列福申請に伴って史料は全てローマに献じ、コピーすらないと言うが、それは正直信用できない。後から調べたところ、相当数の史料はラザリスト修道院のアーカイブからの提供で、当然原本は修道院にあったのである。

また、彼らの言によれば、事件処理交渉の記録は外交の記録であり、真実と乖離していることが往々にしてあるので信用しない、ということであった。しかし、日本軍の責任と賠償を追及する側には決定打が欠けていたことは明白である。現在言われているような劇的かつ衝撃的な虐殺が、日本軍によってなされたことが当時はっきりとしていたならば、あのような腰砕けの交渉にはならなかったはずである。宣教会側も目撃者の証言を集めて記録したのであるから、これもまた有無を言わせぬ真実として、後世にその悲劇を語ることができたはずである。史料はそれができなかったことを証明している。

スフラーフェン財団やオランダ・カトリック教会が、列福申請に用いた正定事件における拉致殺人の実行犯と動機をもう一度述べると、犯行は日本軍によるもので、動機は200人の女性を慰安婦として軍が徴用しようとしたのを妨害したことにある。筆者は『正定事件の検証』[119]においてこれを否定した。現日本政府も与党の特命委員会で、明確に筆者と同じ見解であると回答した。事件当時においても、日本政府及び軍は直接の関与と責任を否定しているし、動機に至っては交渉でも主要史料でも記述はほとんどなく、推測するものがわずかにあるだけである。

中国側は本件に関して、財団に対し非常に好意的姿勢で協力している。2014年10月には河北省石家庄市において国際シンポジウムを催し、ベルマーカース師やヘルマンス氏などのオランダ関係者のほか、フランスやオーストリアなど被害者出身国の外交官が招待され、日本カトリック中央協議会も参加し、当時の東京大司教からのメッセージが読

み上げられている。主催は河北師範大学歴史文化学院、復旦大学宗教国際関係研究センター、信徳文化研究所によるもので、抗日戦争における西洋人宣教師の人道的協力と貢献の研究を目的とし開催された[120]のだが、結局は日本軍の犯罪を明らかにすることが主目的になっている。

中国共産党は長いことキリスト教を弾圧し、あるいは完全な管理下に置くことに力を入れていたので、抗日戦争期の宗教活動について研究が進んでいなかった。正定事件のような小さな事件などは尚更であったろう。しかしながら、これ以後シンポジウムを事件80周年にあたる2017年にも行い、先に述べた正定の旧宣教会跡での新記念碑建立、司教の石像建立など、地元での顕彰活動の成果を着実に積み上げている。毎年のように、宗教関係者だけでなく子供すら含む訪問団をオランダへ送り込んでいるのも、その一環であろう。

日本においては、2012年の75周年式典の参加を契機に、日本軍の戦争犯罪としての正定事件が、日本司教団の公式声明を出した池長大司教により、しばらくの間メディアや集会で伝えられた。これに対し、信徒から疑問や根拠を求める声が挙がってから、教会側からの発信は途絶えてしまったようだ。その後様々な形で疑問や反論が世に出たが、日本カトリック教会は沈黙を保ったままである。

7．おわりに

正定事件は財団説が主流で、これに反する見解はほとんど認知されていない。しかしながら、本稿で事件の詳細について史料に基づいて検証してみた通り、真犯人や動機について全貌を明らかにするにはまだ不十分であるのは間違いない。ただし、日本側が当時示したいくつかの見解は、事件現場で実際に行われた行為や目撃情報から、不誠実な虚偽ではなく、自然に推測され至った結論であったと考えている。すなわち、一時的に日本軍に協力した中国人（満人かモンゴル人、朝鮮人かもしれない）の馬賊なり匪賊、あるいは帰順した中国兵が、日本軍より支給された軍服や武器を装備して宣教会を襲い、共産党の敵である欧州人宣教師を拉致殺害し逃亡したという、これが記録から合理的に組み立てた推論である。婦女子は宣教会で何人も被害を受けておらず、日本軍は正定に初めて入り、その夕方にはカトリック教会と反共の立場で連携していくことを演説していることから、かくも残虐な犯罪を、係争国でない欧州人に限定して行う動機が全く考えられない。

オランダ政府の調査担当責任者は、政府としては本件に介入する意思はないことを前置きしながらも、歴史家の見解として財団説の動機はにわかに信じがたいと、筆者に対して述べた[121]。オランダの歴史家ハリー・クニップスヒィルツ博士（Harry Knipschild）も、スフラーフェン財団の歴史考証に対する姿勢について2013年に疑問を呈しているが[122]、カトリック教会も財団も、史料の公開どころか何ら反応しなかった。そして、学術的議論に発展しないまま、列福審査は最終段階へ近づいているのである。

毎年のようにオランダ・中国間に人的交流があり、イベントが行われ、情報が発信されている一方、我が国では公式謝罪した日本カトリック教会に対する反論すら無視され続け、オランダとの開かれた議論を行う下地を作りながらもこれを継続する余力もなく、筆

者の力不足も大きいが、同時に言われている山西省やフィリピンでの宣教師変死事件の調査研究まで手を付ける余裕もない有様である。

財団説は学問より宗教が全面に出ていることで、真犯人が誰であるとかどの部隊であるとか、詳細な事実に到達していなくても、また、動機が根拠に乏しい推測同然のものであっても、列福の申請や中国におけるシンポジウムの開催などには全く問題はなかった。結局の所、過去の事柄を歴史として人々に認識させることができれば、一般的にはそれでよいのである。これを正すのは学問の力であり、政治力を用いて誤った説が拡散される場合は、学問に加えて政治力をより強く発揮してこれを抑えるしか道はない。南京にしろ、慰安婦にしろ、未だに海外で問題が片付かないのは、既に学問だけで片付かないにもかかわらず、我が国の歴史方面における政治力の振り向け方と戦略戦術に大きな誤りがあるからである。学問は優れた学者を長期で研究に投入すれば自ずと成果は出る。しかし政治はより複雑で、力が物を言う。全力を尽くしても、対抗する勢力が強ければ敗れるだけである。そして結果が全ての世界である。

歴史に関しては、前述の通り一般の認識を勝ち取ることが重要であるから、時間をかければかけるだけ先行する説の一般化が進み、これを覆すのは非常に困難になる。長期間かけて、日焼けした皮膚を透き通った白い肌に戻すような難関が待っている。そして、たとえ体の一部分だけ白くできたとして、果たして真実の勝利と言えるだろうか。

歴史認識問題は学問だけでもなければ政治だけでもない。サイバー対策同様、歴史部門でも、研究調査機関と情報機関、これに強力な宣伝部門を有機的に結合し、政府の統一的指揮の下にヒト、モノ、カネを十分に集積し、積極的に海外に打って出て初めて、この見えざる国難を打開できるのではないだろうか。そうでなければ、民間側のあらゆる努力は、100年の後には世界に対し何ら効力を持たなくなるのではないかと危惧している。

注

1 『カトリック新聞』2012年11月4日（4169）号、「カトリック新聞オンライン」2013年4月11日。http://www.cathoshin.com/2013/04/11/schrave/（2017/３/3、現在記事は閲覧することができない）
2 運営はフランス・ラザリスト（ヴィンセンシオの宣教会）であった。
3 カトリック教会が管轄する宣教管区。使徒座代理区とも言う。
4 「第１軍作戦経過概要　第３章　石家荘及滦陽河付近の会戦　昭和12年12月25日　第１軍参謀部第１課」（防衛省防衛研究所所蔵『第１軍作戦経過概要　第３章』アジ歴C11110982700）
5 Chanet, Louis（24 Oct., 3 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
6 Gérardin, Laurent（1938）“Le drame de Tchengtingfou”. *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* pp. 358-359.
7 Chanet（24 Oct., 3 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 358.
8 Chanet（24 Oct., 3 Nov. 1937）*La lettre,* Lacoste（10 Janv. 1938）*Le bulletin N.13-P,* Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 358.
9 Dassonville, Denise（1938）“Les événements d’Octobre à Tchengtingfou”. *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p.371.
10 Chanet（3 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
11 （7 Nov. 1937）*Le rapport de la gendarmerie japonaise,* Lacoste（19 Nov. 1937）*Le bulletin N. 721,* De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103.*
12 Chanet, Louis（24 Oct. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
13 Aubé, Félix（1937）*La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 4”, Archives historiques CM, Paris.
14 （7 Nov. 1937）*Le rapport de la gendarmerie japonaise,* De Vienne, Jean（30 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103.*
15 Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 360.
16 De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* pp. 359-360.
17 Chanet（23, 24 Oct. 1937）*La lettre,*（7 Nov. 1937）*Le rapport de la gendarmerie japonaise,* De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 360.
18 De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 360.
19 Chanet（3 Nov. 1937）*La lettre,* Kok（1 Déc. 1937）*Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
20 Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 360.
21 Chanet（23, 24 Oct. 1937）*La lettre,*（7 Nov. 1937）*Le rapport de la gendarmerie japonaise,* De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre,* Kok（1 Déc. 1937）*Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Dassonville（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 371, Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* pp. 360-361.
22 Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 361. Zr. Maria Goretti（2005）*Het martelaarschap van Mgr. Schraven en gezellen.* Hermans and Bellemakers（2009）“The drama of Zhending, 9 October 1937”.
23 （7 Nov. 1937）*Le rapport de la gendarmerie japonaise,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 362.

24 De Vienne (30 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 362. Dassonville (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 371.
25 Chanet (24 Oct. 1937) *La lettre,* (7 Nov. 1937) *Le rapport de la gendarmerie japonaise,* De Vienne (30 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 363. Dassonville (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 371.
26 Chanet (23 Oct., 3 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin (16 Oct. 1937) *La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise "Chang-Ting-Fu 4", Archives historiques CM, Paris.
27 「陣中日誌　自昭和12年10月1日至昭和12年11月4日　独立攻城重砲兵第２大隊第２中隊（３）」（防衛省防衛研究所所蔵『独立攻城重砲兵第２大隊第２中隊陣中日誌』アジ歴C11111877000）
28 Gérardin (16 Oct. 1937) *La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise "Chang-Ting-Fu 4", Archives historiques CM, Paris.
29 Dassonville (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 373.
30 (7 Nov. 1937) *Le rapport de la gendarmerie japonaise,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
31 Chanet (24 Oct. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
32 Gérardin (16, 26 Oct., 2, 8, 9, 14, 20 Nov. 1937) *La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise "Chang-Ting-Fu 4", Archives historiques CM, Paris.
33 Lacoste (22 Oct. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
34 「森島参事官発廣田外相宛第896号電（1937年10月25日付）」（外務省外交史料館所蔵『支那事変第三国人関係事故及被害関係（派遣軍行動ニヨル事故ヲ含ム）』）
35 Chanet (3 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
36 (7 Nov. 1937) *Le rapport de la gendarmerie japonaise, Chemise 103,* Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
37 Gérardin (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* pp. 365-366.
38 Lacoste (18 Nov. 1937) *Le bulletin N.711,* Kok (1 Déc. 1937) *Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Lacoste (10 Janv. 1938) *Le bulletin N.13-P,* Delbos (31 Janv. 1938) *L'instruction N.26,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
39 大阪聖ヨゼフ宣教修道女会編集委員会（1991）『走るべき道を走り…』36頁。
40 De Vienne (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 352.
41 Lacoste (18 Nov. 1937) *Le bulletin N.711,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
42 Lacoste (26 Oct. 1937) *Note,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
43 Morishima, Morito (13 Feb. 1938) *Official document,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
44 Kok (1 Déc. 1937) *Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
45 De Vienne (30 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
46 De Vos van Steenwijk, Godert Willem (14 Jan. 1938) *De brief N.80/9,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
47 Chanet (11 Déc. 1937) *La lettre,* 178. Ia, 4°, Chemise "relatif au massacre de Chang-Ting-Fu", Archives historiques CM, Paris.
48 Yokoyama, Hikozane (14 Déc. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
49 De Vos van Steenwijk (14 Jan. 1938) *De brief N.80/9,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
50 同上。
51 同上。
52 同上。

53 De Vos van Steenwijk (8 Feb. 1938) *De brief N.229/31,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
54 同上。
55 同上。
56 中国では「羅馬宗座駐華代表公署」といい、教皇使節は中国における唯一の大司教であった。しかしながら教皇大使と異なり外交官としての派遣ではない。外交権は慣習として布教保護国が握っていた。正定代牧区についてはフランスがそうであった。
57 De Vos van Steenwijk (8 Feb. 1938) *De brief N.229/31,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
58 興亜宗教協会 (1941)『北支那に於ける天主教の概観』16頁。
59 岡部直三郎 (1982)『岡部直三郎大将の日記』芙蓉書房、139頁。
60 De Vienne (7 Mar. 1938) *La lettre,* 164. IIb, 10, Chemise "Lettres diverse sur tout de Chengtingfu massacre", Archives historiques CM, Paris.
61 De Vos van Steenwijk (22 Maart 1938) *De brief N.474/66,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
62 Morishima (13 Feb. 1938) *Official document,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
63 De Vos van Steenwijk (22 Maart 1938) *De brief N.474/66,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
64 Lacoste (12 avril 1938) *L'acquit,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. De Vos van Steenwijk (19 April 1938) *De brief N.606/100,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
65 Chanet (3 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
66 Chanet (23 Oct. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
67 Gérardin (8 Nov. 1937) *La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise "Chang-Ting-Fu 4", Archives historiques CM, Paris.
68 Gérardin (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 356.
69 (7 Nov. 1937) *Le rapport de la gendarmerie japonaise,* De Vienne (30 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103.*
70 Dassonville (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 371.
71 Gérardin (1938) *Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 363.
72 「陣中日誌　自昭和12年10月1日至昭和12年11月4日　独立攻城重砲兵第２大隊第２中隊（２）」（防衛省防衛研究所所蔵『独立攻城重砲兵第二大隊第二中隊陣中日誌』アジ歴C11111876900）
73 Gérardin (16 Oct. 1937) La lettre, 178. Ia, 1-10°, Chemise "Chang-Ting-Fu 4", Archives historiques CM, Paris. Lacoste (19 Nov. 1937) *Le bulletin N. 721,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
74 Chanet (3 Nov. 1937) *La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
75 De Vos van Steenwijk (8 Feb. 1938) *De brief N. 229/31,* Archief : Nederlands Gezantschap in China (Peking, Chunking, Nanking), National Archief, Den Haag.
76 「方軍情報第127号附録」（防衛省防衛研究所所蔵『北支那方面軍状況報告綴』アジ歴C11110932700）
77 『支那事変 第三国人関係事故及被害関係』（派遣軍行動ニヨル事故ヲ含ム）、並びに外務省執務報告東亜局 第三巻 昭和十二年 pp. 329-330、『支那事変ニ関連スル在支第三国（英米ヲ除ク）財産被害調査表／1939年』外務省欧亜局、21-22／44、pp. 37-38.［佛蘭西］、38／44、p. 58.［波蘭］、33／44、p. 60.［和蘭］（外務省外交史料館所蔵、欧亜二_21）。
78 Morishima (13 Feb. 1938) *Official document,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
79 Kok (1 Déc. 1937) *Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
80 田口芳五郎（1938）「北支より帰りて」『聲』昭和13年2月号（745号）、10-14頁。

81 小松孝彰（1938）『支那を喰ふ共産党の実状』今日の問題社、43-49頁。
82 西森久記（1941）『鬼神も哭く　熱血の慰問行』新興亜会出版部、27頁。
83 Gérardin（16 Oct. 1937）*La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 4”, Archives historiques CM, Paris.
84 同上。Lacoste（19 Nov. 1937）*Le bulletin N. 721,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
85 （7 Nov. 1937）*Le rapport de la gendarmerie japonaise,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
86 Morishima（13 Feb. 1938）*Official document,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
87 Bruno, André（28 Oct. 1937）*La lettre,* 164. IIb, 10, Chemise “Lettres diverse sur tout de Chengtingfu massacre”, Archives historiques CM, Paris.
88 アンジェロ神父「陝西省に於ける共産党の活躍」『聲』昭和13年2月号、15-18頁。松本重治（1989）『上海時代（下）』中央公論新社、183頁。ジョン・B・パウエル（2008）『「在支二十五年」米国人記者が見た戦前のシナと日本（下）』中山理訳、祥伝社、74頁。石川禎浩（2010）『革命とナショナリズム』岩波書店、158頁。
89 渡辺龍策（1964）『馬賊―日中戦争史の側面』中央公論社、159-160頁。
90 同上、158頁。
91 同上、160頁。
92 Gérardin（9 Nov. 1937）*La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 4”, Archives historiques CM, Paris.
93 Kok（1 Déc. 1937）*Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
94 Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* pp. 365-366.
95 Hermans, Vincent and Bellemakers, Wiel（2009）“The drama of Zhending, 9 October 1937” https://www.mgrschraven.nl/uk/pdf/The_drama_of_Zhending.pdf（2019/12/7）
96 De Sutter, Geert（2012）*Post uit China,* Mgr. Schraven Stichting, Netherlands.
97 Gérardin（16 Oct. 1937）*La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 4”, Archives historiques CM, Paris.
98 Kok（1 Déc. 1937）*Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
99 同上。
100 同上。
101 Chanet（5 Oct. 1937）*La lettre,* 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 5”, Archives historiques CM, Paris.
102 Dassonville（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103*, p. 375.
103 Chanet（23 Oct. 1937）*La lettre*, De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103*, p. 362. Dassonville（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 372.
104 Chanet（3 Nov. 1937）*La lettre*, Kok（1 Déc. 1937）*Statement made by the Rev. R. E. Hill,* Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.
105 「第１軍作戦経過概要　第３章　石家荘及滦陽河付近の会戦　昭和12年12月25日　第１軍参謀部第１課」（防衛省防衛研究所所蔵『第１軍作戦経過概要』アジ歴C11110982700）、「第六師団報告（10月10日）」（防衛省防衛研究所所蔵『第１軍機密作戦日誌　巻３』アジ歴C11110960700）、永野光哉（1965）『熊本兵団戦史』熊本日日新聞社、66頁。
106 「戦場掃除及戦死者埋葬規則」（防衛省防衛研究所所蔵『明治37年陸軍省達書綴』アジ歴C08070662000）
107 De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre*, Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103*, pp. 359-360.

108 De Vienne（30 Nov. 1937）*La lettre*, Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes. Gérardin（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103,* p. 362. Dassonville（1938）*Annales de la Congrégation de la Mission Tome 103*, p. 371.

109 Lacoste（10 Janv. 1938）*Le bulletin N.13-P*, Chemise 103, Centre des Archives diplomatiques de Nantes.

110 深田悠蔵（1939）『支那共産軍の現勢』改造社、124、136頁。

111 1941（昭和16）年11月20日には正定で起きたことと同様の事件が発生している。河南省開封代牧区のバロージ司教（Antonio Barosi）は同教区内の鹿邑へ視察に向かい、現地の教会で食事中のところをカーキ色の軍服と便衣姿の兵士16名により襲われた。兵士たちはその場にいた宣教師、信徒ら全員を捕縛し、イタリア人と中国人を別々の部屋に監禁した。そして「漢奸、スパイと資本主義の走狗」の罪状により司教はじめイタリア人４名（司教の他にザナルディMario Zanardi、ザネッラBruno Zanella、ラザローニGerolamo Lazzaroniの３神父）はその場で絞殺され井戸に投棄された。中国人たちに対しては正定の時と同様、「中国人は関係ないので帰れ」と命じて７時間後に解放している。

112 Gérardin（26 Oct. 1937）*La lettre*, 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 4”, Archives historiques CM, Paris.

113 Gérardin（26 Oct. 1937）*La lettre*, 178. Ia, 1-10°, Chemise “Chang-Ting-Fu 4”, Archives historiques CM, Paris.

114 笠原（1946）「正定天主堂文主教及其司鐸殉難經過」『益世報』1946年5月10、11、12、13、18、19日掲載（国立国会図書館関西館所蔵　ID：1200500475579）。

115 De Greeve, Henri（1938）”In memoriam”. *Ter Herinnering*, Studiehuis St. Vincentius à Paulo, p. 3.

116 ヘルマンス氏は財団説の鍵を握る人物であるので、是非とも直接会って研究成果について議論したかったのだが、日本人に対する警戒心が極めて強く、2018年のオランダ調査時に筆者との面会は拒否された。

117 『カトリック新聞』2012年11月4日（4169）号。

118 高山右近関係説明資料http://augusutinusu-t-ukon.cocolog-nifty.com/httpjusutotuko/files/takatukikyoukaigaido1.pdf（2019/12/24）

119 峯崎恭輔（2017）『正定事件の検証――カトリック宣教師殺害の真実――』並木書房。

120 「“正定教堂慘案暨宗教在战时的人道主义援助” 学术研讨会在石开幕」http://chinesecs.cn/72.html（2019/12/27）

121 筆者は2018年12月に、オランダ外務省歴史室長（当時）であった、ファン・デル・ツヴァン氏より個人的見解を伺うことができた。

122 https://www.katholiek.nl/opinie/kanttekeningen-bij-zaligverklaringsproces-bisschop-schraven/（2019/12/7）